
媚薬のチカラ

不知火仁

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

媚薬のチカラ

【NZコード】

N8013C

【作者名】

不知火仁

【あらすじ】

割りと普通の高校生活を送っていた武藤樹は、ある日佐々倉から貰った飴玉を無防備にも口にしてしまう。それはただの飴玉ではなくノッポが通販で買った媚薬で……。

始まりは最後の日常

薬とは一時的な作用しかなく、その効き日はいつか切れる。

風邪薬然り^{しか} 麻醉薬然り^{しか} 毒薬然り^{しか}。

どんな薬にも終わりは在つて、例外は有り得無い。
だからこの薬から始まつた物語にも、きっと例外無く終わりが来るのだろう。

ならば私は、その終わりを見届けよう。

他愛もない世界の

「なあ母さん、メシまだ？ 僕腹減ったんだけビ」「ちよつ、今いい所なんだから邪魔しないでよ！」
「いや、でもさつせと仕度しないと姉ちゃんが料理始めちまうぞ？」
「わつそれはヤバッ。何してるの、早く止めてきなさい！ オ母さんもすぐ行くから！」
「あいあい」

え、えつと、な、ならば私はその終わりを見届けよう。他愛もない世界の片隅の、他愛もない日常の、少しばかり理不尽で傲慢な強制恋物語つ。
はい、語り終了！

その日の朝も、間違いの無い日常の始まりだつた。
その日常の端つこで、間違えようのない田覚ましが容赦なく鳴り続ける。

「…………」

田覚ましの主は布団の中でその耐えるには難き拷問に耐え続け、そのうちそれをセツトした人間（自分）を恨めしく思い、馬鹿らしくなつた所で諦めて恋しき場所を後にした。

それも変わり無き日常で、少年は感慨も無く制服に着替え、朝食

を食べ、登校し駅に向かう。

いつもの風景。いつもの日常。

それが非日常に変わったのは、教室に入つてからだつた。

俺が教室に入つて直ぐ異変があつた。いつものように談笑をしていた女子四人組が、喋るのを止めて俺のことをまじまじと見つめてきたからだ。

「……何だ？」

その視線を軽く流そうかと思ったが、そいつ等から不穏な気配がした為一応訊ねる。

こいつらの考える事は俺に一縷の幸福もくれない事を、俺はこの高校に入学して二ヶ月で学習している。

その牽制を含めた質問に、慌てて一人の小柄な少女が返してきた。

「え、あっ、おおはよう武藤君。今日はいつもより早いんだね」

「早いって今日もいつも通りの時間だろ。電車通学だしそうずれる事は無いと思うが。ああ、それとおはよう、紺」

その的外れな返事を言つている少女に、俺は答え返す。嘘のつけない彼女の動搖ぶりから見てもこいつらが俺に何かを隠していることに間違いは無さそうで、とりあえず退避しようと俺は自分の机に向かい鞄を掛けた。と、

「ねえ、樹は甘い物は苦手？」

唐突に、今まで沙良の隣に居た筈（筈ー）の勇紀が俺の机に乗り出して訊いてきた。ちなみに紺達の居る場所は俺の机から5mほど。アレか。瞬間移動か。

「嫌いではないがとりあえずだけ。邪魔だ」

鼻が触れそうなほど顔を近づけて何か期待のこもつた瞳で俺を凝視してくるそいつを片手で押し返す。

幼馴染みであるこの草薙勇紀は女のくせに暑苦しい。

とりあえず性格が暑苦しい。人懐こくよく喋るので誰とも仲良く

なるが、毎日聞いていると気が滅入る。

ついでに体格が暑苦しい。俺の五倍ほど飯を食つこいつは新陳代謝が良いのか悪いのか、栄養が上半身の上半分に偏っている。

更にこいつは陸上部で、今は朝練後の朝休み。そのため今の勇紀はまだ茹でつていて、近づくだけで熱気を感じる。暑苦しさ二倍。そんな感じで暑苦しい勇紀は何故か他の男子共に人気がある。俺の前席の和人いわく「そこがイイ」のだそうだ。……どこが「イイ」？

そのため「イツと馴れ馴れしくしている（つもりは無いが）と、俺が男子どもの反感を貰うことになる。

こいつが俺に近づくと暑苦じく恨みを貰つ。その中に俺の安寧は存在しない。

ならばそれは俺にとつて損でしかなく、それを避けるためには、この、押しても押しても、迫つてくる、幼馴染みを、押し返さなくちゃいけないんだぐそつ……！！！

「おい、お前達も手伝え。何傍観してんだ」

勇紀消えた四人組は一部始終を楽しげに見ていた。コレはコントじゃねえぞ。特にそのノッポ、何笑いを堪えてやがる。

その中で一人だけ何故か恥ずかしそうに俺達の事を見守つていた紬は、

「え、あつ、ゆ、勇紀ちゃんつ！」

慌てて俺から勇紀を剥がしてくれた。

「ちょっと沙良^{さら}、邪魔しないでよー」

勇紀はせっかく手に入れたおもちゃを取り上げられた子供のようにもぐれる。……いやいや、この比喩は間違えた。それでいくと「おもちや」とは「俺」のことになつてしまつ。

「……まあとりあえずサンキュー、紬。助かった」

「えつ、あ、ええと、ど、どういたしましてつ」

紬はまた恥ずかしそうに俯いた。長い前髪で表情がよく見えない。紬沙良はおとなしい。それが俺の認識であり、世界共通の認識で

もある。

詳しいことは俺にも知らない。風の便りをそのまま流すなら、入学当初虐められていた彼女を、勇紀達が助けた。それだけのこと。それ以上は知らないし知る気もない。だつて今、紺は勇紀達と居てとても楽しそうだ。

「はいはい、そこまで。一人とも、当初の目的を忘れるな？」

そこでやつと、紺達を欠いた傍観者二人が入ってきた。遅えよ。

「佐々倉ささくらとノツポは置いといて、なぜ蒼井あおいさんまで助けてくれなかつたんです？」

「いやあ、たまにはこういうのもいいかなと。ごめんね？」

この中では常人の域に入る蒼井さんは、あははと愉快そうに笑う。その笑いに悪意は無く、蒼井さんの隣で腹を抱えて爆笑してる奴より何倍もいい。

「茜あかね、馬鹿笑いは止せ。そんなものは、後にとつておけ」

この中で一人だけ終始無表情（さつきの傍観時は微かに口の端を歪めていたが）だった佐々倉は、眼鏡のブリッジを軽く押さえながら一聲でノツポ（佐々倉の言う茜）を諫めた。

「ちえつ、いいじやんか、別に減るもんじやないし」

言いながらノツポは笑いを止める。そこで佐々倉は俺に“あるもの”を掲げた。

「甘いものは嫌いじゃないと言つたな。ならばコレを食べてみる」

俺は佐々倉から“ソレ”を受け取る。透明な包みから覗くソレは、丸くてビー玉程度の大きさ。色は透き通った赤色で、パツと見それは飴玉だった。

「？ 何だよ、コレ？」

「飴玉以外に見えるか？ 見えるなら言つてくれ。まあそもそも食わないというのなら返してくれても構わんが」

眼鏡の向こうの鋭い眼が俺に尋ねる。そやは言われても、受け取つたそれは飴以外の何物にも見えず。

「いや、貰えるなら貰うが。……毒薬とかじやないだろうな？」

まあかいぐらこいつでも致死性のイタズラをしないとは思つが。
いや、こいつの場合否定しきれない。何せ相手は、あの佐々倉である。

俺は一番嘘をつかなそな（と）いうかつけない）紺に訊いてみる。

「なあ紺、これ食つて死に瀕することが起きたりするか？」

「え、い、いくら鏡さんかがみでもそんな武藤君が死んじやうよつなことはしない……です。……少なくとも、それは」

いきなり話をふられた紺は反射的に答える。言葉が尻すぼみなのは多分言いながら紺も確証が無くなつてきたからだろう。佐々倉が横田で紺を見て、ノッポがまた笑う。ツボ広いな。

まあしかしそれを訊いて安心した。紺が言つならコレは毒薬ではないのだろう。例え激辛の飴玉だつたとしても、辛党の俺なら何とか耐えられる。そう思い俺は飴玉を口に放り込んだ。

「……けど、えつと……」

そこからさうに紺は続けようとしたが、何故かそのまま口を開ざしてしまった。それ以前に、声が小さ過ぎて俺は聞いていなかつた。そこにまま口の中で飴を転がし続ける。

その飴はトロン……と、じんわりした甘さを持つていた。それは一瞬で口内に浸透し、視界をまどろみさせる程だが強烈という言葉は絶対に似合わない甘み。

それをもつと味わうためにそのまま飴を舐めようとする、

「…………？」

「ソレ」は口の中から跡形も無く消え去つた。まるで固体がそのまま氣化するように、あまりにも不可解な消失。

「？ なあ、コレ一瞬で溶けちまつたんだけ、ど……？」

振り返ると、こいつの間にか俺の前には紺が他四人に押し出されていた。

「…………」

紺は何故か緊張で固まっていた。その表情は何か俺を心配するような気配も漂つっていて、それが俺を不安にさせる。

「…………と勇紀。

「…………と蒼井。

「…………と佐々倉。

「…………とノッポ。

「…………どうしたんだ？」と俺。

堪えられなくなり、俺は紬の後ろに隠れている四人に訊いてみる。ちなみに紬は緊張のあまり立つたまま気を失っていた。一体どうしたんだ？

「「「「え？」」「」」

四人は一緒に声を漏らす。それは驚きといつより疑問に近かった。

「え、樹、なんとも無いの？」

勇紀が不思議な事を聞く。

「どこか異常に見えるのか？」

俺は両手を挙げて何も無い事を表現する。

「ちょっと、じゃあ『あれ』は偽物だったって事！？ 結構高かつたのよ！？」

ノッポは悲痛そうな叫びを上げる。

「私は元々信じて無かつたけどね」

「私も。紬さん、大丈夫？」

佐々倉は解りきっていたとでも言つように眼鏡のブリッジを押さえながら肩を竦め、蒼井は氣絶した紬を介抱し始めた。

「？？？」

意味が解らず、俺は五人の有様をただただ眺めていただけだった。

瞬間、

「…………！」

唐突に体が熱くなつた。

視界が歪み、意識が朦朧とする。

足の震えは止まらず、体を支えきれず倒れそうになる。

心臓は破裂しそうなくらい脈を打ち、沸騰したような命の源が体けつえき

を巡る。

体の感覚が消えかけ、俺の頭の中は真っ白になり

その永遠と感じた一瞬は、ぴたりと止んだ。

「あ」

離れかけた意識が標準を合わせる。

体を確認するがどこにも異常はない。その普通さが、今の感覚を夢の様に感じさせる。

「どうしたの？」

勇紀の心配そつな声に顔を上げる。そして、見てしまった。

「

俺の前には毎日見てくる女子五人。今までと変わり無いそこそこの姿が、

とても可愛く見えるのは、何故だらう。

「…………？」

俺は飛び退いた。勇紀達の居る壁際から反対方向の壁まで、背中を強打するぐらの勢いで、全力で勇紀達との間合ひを離す。

「……え？　どうしたの？」

「来るな！　近寄るな！」

近寄つてくる勇紀を片手を突きつけて制す。その姿を見た勇紀の心配そうな表情が、とても可憐に見えるのは、何故だらう。

「え、どうしたんですか？」

目が覚めた紺、それを抱える蒼井、その隣で変なものを見るよつな目で俺を見ている佐々倉、果ては何故かこの状況を理解し楽しん

でいる表情のノッポの姿までもが、とても、とても綺麗に見えるのは、何故だろう。

「ほう。つまりコレは、あの『媚薬』が本物だったという確証か？」
佐々倉の言っていることが全く理解できず、そのまま俺は五人に見惚れていた。

始まりは最後の日常（後書き）

始めてみた連載小説。ちゃんと続けられるかもの凄く不安です。

後悔を後に立てず・Aパート

『つまりさつきのは毒薬ではないがノッポが通販で面白半分に購入したあの有名（？）な媚薬であつて、その効果を確認するために俺（と紺）を実験台にし、だがしかし効果時間が遅くてお前達はアレが偽者だつたと油断し、その時に俺がお前達を見ていて、その所為で効果を發揮した媚薬の力で不本意にも俺はお前達に惚れちまつた、と？』

話の要点をまとめなるべく簡潔にした俺の確認の文章に、確信犯五人は『ＹＥＳ』の一文で答えた。

「…………」

俺は呆れて机に突っ伏す。そのままうなだれ、教室の反対側で恐る恐る俺の様子を窺つている五人を睨んだ。この状況でも『あいつら綺麗だなあ』とか思う俺の頭を、今すぐどつかに叩きつけたい。

今は一時限目の国語が終わり休憩時間。あの後すぐにチャイムが鳴り教室に担任が入ってきたことで、違うクラスの佐々倉とノッポは自分の教室に戻ってしまい、俺は説明を訊く時間が無く席に着いた。

入学当初のままの席は男女混合の名前順になつており、どちらかといえば最初の方である蒼井、草薙、紺は武藤の苗字を持つ俺の席とは離れていて、授業中に話を聞くことは出来なかつた。

そうして時間が経ち今、俺はこうして机の上でメールを使った会話であいつらに説明を聞いている。席が離れていたのは不幸中の幸いだったのかもしれない。もしあいつらが俺に近付けば、俺はさつきみたいにどうにかしてしまう。

紺や蒼井さん、佐々倉ならまだしも、ノッポや勇紀までもが可愛く見えてしまうというはどうにも納得がいかない。他が勇紀達をどう見ていようが、俺自身が納得できない。

『……それで、コレを戻す方法はあるんだろうな？ 薬とか方法とか』

俺は一番訊きたい肝心な部分を書き送信ボタンを押す。それさえあればこんな妙なやり取りも終わる。

勇紀の携帯の着信音。勇紀達はそれを開き

「……げ」

とりあえずそれなりに聴力の良い俺の耳が、ノッポのそんな声を聞いたのは間違いだと思いたい。

……間違いだと決め込み、俺はあいつらを信じて確認のメール。

『持つてる。よな？』

返事が返つてこず、俺は首をあいつらに向ける。俺はノッポを信じているさ？ 信じてるとも。あいつらだって一応れっきとした高校生だ。ちゃんと後の事を考えられる頭を持つている筈だ。だが。

「ア、アハハ……」

……そんなノッポの空笑い（ああ、ノッポの笑ってる顔もいいなあ）だけで、その状況を理解してしまうのはきっと俺だけじゃない筈。……今一瞬、変なこと思わなかつたか、俺。

『……普通、こういうものには解薬を用意するものだと思わないか？』

『いやーなんかこれ面白田ううだなつてのは思つたんだけど先のことはあんまり……b y茜』

その返事を見て俺は頭痛になりそうな頭を抱える。どうやらノッポは自分が面白いことしか考えず他のことは気にしない性格のようだ。分かつてはいたが。

『ならば昼休みに図書室に置いてあるパソコンでも使って調べる。迅速かつ適切な解決法を探し出せ。まさかそれを買った場所すら覚えていないとか言わないよな。どうしてもネットは無限といつものが有限。隠れられる場所はない。なせばなる探せば見つかる。なんとしても今日中に見つけ出して報告しろ。……でないと、分かつてる

よな?』

脅威の速さで文字打ち、送信。いつもの絵文字、顔文字は使わない。そんなもの、無駄に圧力を減らすだけだ。

着いた文面を見てノッポも理解したのだろう。即行で帰つてきたメールには『了解、全力で頑張る』と簡潔に記されていた。

「……ハア」

それを見た俺は今更ながらに四月上旬の出来事に感謝してみたりもした。余談であるが俺は生まれながらに田つきが悪い。だからその所為でケンカを売られるのはよくあることで、入学して一ヶ月経つていないうちの日も、それは繰り返された。

勇紀達との帰り道、すれ違いに田が合つ上級生。ソレは立ち止まり、俺の肩を掴む。

田つきが悪いと、やつぱりソレに絡まれる俺。ああ、本当に可哀想な俺。

俺の周りにソレの仲間が群がり、俺を囲む（男女混合だ）。

蒼井さん達が上級生達を止めようとして、勇紀が止める。

それが誰でもない自分達を助けるためだと、蒼井さん達は後で気付く。

無理遣りこじつけられる因縁、浴びせられる罵詈雑言。元々原形を留めていない日本語が混ざり合つて、ついに宇宙人と交信できるレベルになつた。おめでとうNASA。

めんどくさい（というか地球人である俺はこいつらとは交信せない）ので、何も言い返さず黙る俺は、ソイツらにとつて格好の獲物でしかなく。

ついに弱者に向けて振り上げられた拳は、終ぞ振り下ろされることはなかつた。

誰だつて殴られるのは嫌いで、そんなものは俺も同じだ。

だから、やられた前に、『やつてやつた。

……他人の話を聞けば、『ソレ』はまるで台風だったたらしく。剥がれた屋根のように吹き飛ぶ達。
壁に打ち付けられ動かない人形みたいな性別なんて関係ない。殴り合つ氣もないが宙を舞い、『白一』だの『眼福だ!』などと叫ぶ輩もいたそうで。残つたのは、息も切らさず佇む俺一人。

……『ソレ』はあるで台風だったと、怯えたノッポは言つていた。

校内賑わう昼休み。気付いてないのか無意味だと分かっているのか、屋上に出る生徒は一人も居ない。……俺達を除いて。

「なんであいつらから媚薬の話を聞いた時に止めてくれなかつたんですか。その所為で解薬が見つかるまでは俺こんな感じで過ごさなきゃいけなくなつたじやないですか」

「ホント、ゴメンね。でもいきなり『私この間通販で媚薬見つけたから買つたんだ!』って高らかに言いながら飴玉(つぼいもの)を見せられても、普通誰も信じないでしょ?」

「……まあ、確かに」

確かにそれは一理ある。『俺ツチノ口見つけたんだ!』と言ひながら蛇(らしきもの)を見せられても、信じてもらえないどころか場合によつては病院を紹介されかねない。

「まあこれも君がむやみやたらに人から貰つたものを口に入れてしまつた所為だと諦めなさい」

「……まったく、他人事だと思って」

そういうながらも否定できない事に腹を立てて俺はさつき購買で買ったハムカツサンドを校内設置の自販機で買った炭酸飲料で流し

込んだ。……むせる。

「あ、今ヤケ食いしたね？　だめだよ、炭酸飲料を一気飲みなんて
その俺の行動を注意するのはさつきから俺の話しが相手になつてく
れでいる、あの中では一番普通まともな人である蒼井さんだつた。
……いやまあ、確かに『あの中』ではまともな性格・言動なのだ
が、その、見えていない筈の俺の行動を読むのは何とかしてほしい。
屋上は俺と蒼井さん以外いつも誰も居ない。多分それは鍵が開い
ている事を誰も知らないからで、なのにそれを分かつていながら（
もしくは分かつてあるからこそ）、俺達は階段上の小さなスペース
によじ登り（もちろんハシゴでだが）、じりじりして隠れて静かな昼食
を摂つてゐる。

ちなみに今日は一人とも、給水塔を背にして反対側を向いている。
理由はまああの薬の所為なわけで。どうやら薬の効果は、相手の顔
を見なければ特に問題ないようだ。媚薬としては欠陥だろ、これ。

「……よく分かりましたね」

と、俺は無意味にわざとことを訊く。いつもは平氣な筈なのだ
が、あの薬の所為か蒼井さんと無言で過いでるのが妙に気まずい。

「そりゃあもう！　ここには私と樹君しか居ない訳だし、暇なときはいつも君の行動を観察させてもらつてるわけだしね」

……何故だろ？　何か今、あまり好ましくない漢字を当てられた
気がする。……氣のせいか。

「……まあこいつらとしては楽ですしね。（つるさこの（主に勇氣とノ
ッポと佐々倉）は）いいし、愚痴も聞いてもらえますし。なにより、
俺はここが気に入つてます」

思つたままを俺は言つ。ここでは学校の喧騒も薄れて、本当に同じ場所なのかと思うほど静かだ。そこでのんびり空を見ながら過ごすのは気持ちよく、まるで秘密基地のような自分だけの空間みたいで落ち着く。だから俺は、そんなここが大好きだ。

他のことは考えていらない。　　自分の平穀を守る為に仕方なく

來ていた前とは違つて、今俺はここに居たいから居るのだ。

「……ふーん、なるほど」

と、なぜかその答えに蒼井さんは少し思案するような返事をする。

? 僕なんか変なこと言つたか?

「 おつと、そうそつ。はい、これいつものです、」

ついつい今日の「じたごたの所為でいつもの日課を忘れていた。腰元に置いてあつたビニール袋からそれを取り出し、蒼井さんに差し出……そうとしたが、直接は渡せないので、給水塔の外回りに沿つて、そのアルミ製の筒型容器を転がす。

「あ、ありがとう。ほんと、いつもごめんね」

「別に構いませんよ。毎回俺の愚痴聞いてもらつてるんですから、これはその相談料です。俺のけじめみたいなもんなんですから、出来れば受け取つておいてください」

「……最初は思いつきり下心見え見えだつたけどね」

「……気付いてたんですか」

もちろん、と笑つて、蒼井さんは俺から受け取つた「コーヒー缶を開ける。自販機にズラリと並んでる炭酸やスポーツ飲料ではなく、学校で働く職員の為だけに自販機の片隅にひつそりと置かれた缶コーヒー（しかもブラック）だけを飲んでいるのが、同じ年の癖に入つぽくて蒼井さんらしかつた。

「樹君ね、結構分かりやすい性格してるよ? それが分からないのは多分他の皆が鈍いだけだと思うけど。……ああ、でもやっぱり皆分かつてはいるのかな。樹君が、そういう人間だつて」

ぽつりと蒼井さんが言つ。それは独り言のようで、俺には何のことだかよく分からなかつた。

「そういう人間つて、俺つて一体どんな風に見えてるんですか? とりあえず俺はそこら辺（主に俺の周りの奴ら）よりはまともな人間を演じてきたつもりですが」

「…………」

と、蒼井さんは黙り込む。……給水塔の反対側に居るから顔は見えないので、なんかその、蒼井さんから変な視線的なものを感じ

るのは気のせいだらうか？

「……蒼井さん？」

少し、ほんの少しだけ身を乗り出して給水塔の反対側を見る。別に蒼井さんを確認するだけなのでチラッと見たら顔を戻せばいい。それならばあの薬も反応しない筈だ。多分。

「何してるんですか蒼井さん……ってあれ」

体を捩^{よじ}らせた俺はそのまま周りを見回す。さつきまで話していた

蒼井さんが、そこには居なかつた。

「樹君」

と、

「なー?」

いつの間にか俺の後ろに、蒼井さんが立っていた。

後悔を後に立てる・Bパート（前書き）

……遅れました。ホントにスマスマン。——

後悔を後に立てず・Bパート

多分俺が反対側を確認した時に、円形である給水塔を逆から回つて来たのだろう。というかそもそもこの人は気配を消すのが上手すぎるだろ。蒼井さんに呼ばれるまで、肩が触れそうなくらいの隣に居る事に気が付けないなんて。

まあしかしそんな事は後々俺が思つた事で、今この時、俺はそこまで頭が回つていなかつたりもした。

「あ、あが……」

小さな顔が近い。鼻が触れそうなほどに近づいてくる蒼井さんの瞳は大きめで、澄み切つた海のように青い。

肩口で切つた黒髪は色素が薄いのか紫っぽく、風に流されカーテンのように靡く。

そして……身を乗り出すように傾く体を支える為に前に置かれた両腕に挟まれて、いつもは気にならない部分が強調されていたりもした。……そういうところが気になるのも、薬の所為なんだろう。きつと。

「樹君、正直に答えて。……樹君から見て、私はどう見える?」

「どう、と、言われて、も……」

今の俺には『俺がすぐ危ないです』としか言いようがない。全くホントに困る。ここまで真っ直ぐ蒼井さんを見れない(しかもいろんな意味で)というのは、結構やばいかもしね。

「もう、どうしたの? そんな風にじどりもじどりしてんなんて、樹君らしくないよ?」

蒼井さんはイタズラっぽく妖艶に笑う(かくくめちゃめちゃ 綺麗だ)。 つてこの人分かつてやつてやがる!

「ちょ、は、離れてください。……な、何かマジでやばそつなんですが……っ!」

「なあに? 声が小さくてよく聞こえないんだけど?」

小悪魔みたいに微笑みながらも蒼井さんは真つ直ぐに訊いてくる。その目が今の俺にはとても直視できなくて、必死に全力でグルグル回る頭から、今この場でそれなりに適切な言葉をなんとか引き抜いた。

「あ、蒼井さんハあいつらと比べて力なりまとモデ、だからおレモ相談しやすくて、何トイウか、どんな時モ頼れル先輩みたいな人デスつ……！」

ほとんど片言になりながらも必死で言い切った言葉が押し潰される。

喋った後には他の感情が込み上げて、それが濁流のように押し寄せてくる。

蒼井さんにならまだ許せそうな気もするが、だがしかしあり誇りとかプライドとかみたいな、けど何か違うそれっぽいものに懸けて女性に真正面から『すごく綺麗です』とか『とても可愛いです』とか『人間界に舞い降りた女神様や』（某宝石箱の人風に『なんて言える筈も無い。（……あ、俺が壊れてる気がする）

蒼井さんはといふと、俺の答えを待ちながらニヤニヤ笑っていたが、俺が必死に捻り出した答えを聞くと半眼で俺を睨みながら唇を尖らせて、

「……むー」

と可愛く唸つた。やべえ、死ぬ。

「そういう風に顔を真赤にしながらそんなこと言われたら好きな先輩を前に恥ずかしくて言い訳をする後輩みたいなんだけどね。樹君の場合は言つてることが真実なんだから困っちゃうよね～」

そんな、俺のさつきの脳内を見せたら絶対幻滅されそうな程の大評価を言いながら俺から離れる蒼井さん。というかその例え、俺の言い訳そのままですよ。

「……でも、私から見た武藤君もそんな感じだよ。どんな時でも頼りになる、私の大切な友達の一人」

何故か嬉しそうに蒼井さんは笑う。……いや、それはいいのだが、

わざわざそれを言つ為にその”大切な友達”にあんな仕打ちをしたのですか蒼井さん……！

言つ事言つたらしい蒼井さんは給水塔の反対側に戻つていく。蒼井さんが視界から消えたところでやつと緊張が解けて、俺はゆっくりと大きな溜息を吐いた。

……マジでヤバイ。こんな事がずっと続いたら、俺が死ぬか壊れるかのどつかになる。絶対。

それもこれもあるの飴の所為で、強いて言えばその飴を持ってきた人物の所為でありつまるところ

「……ノッポの野郎絶対許さねえ……」

怨念の類のような声で俺はここにはいないノッポに怒りを込める。アイツの所為でホントに最悪な一日だ。もしこの昼休み中に解決法を見つけてなかつたら、最低でもこの屋上から逆さ吊りにしてやるっ！！！

俺は拳を思いつきり横振りで給水塔の壁に叩きつける。中に溜まつた水で衝撃が反響し、大きな振動となつて手元に返つてくる。同時に反対側からきやつ、という小さな悲鳴が聞こえた。

「あ！ す、すいません！ そっち側で蒼井さんが寄りかかってるの忘れてました！」

給水塔越しに謝る。

「ううん、大丈夫。……でもそんなこと言つちゃダメだよ。別にヒムラさんも悪気があつてやつた訳じゃ ain't いんだから。人間面白そうだと思ったらそつちにフラフラつていつちやうでしょ。それにさつきも言つたけど武藤君も悪いんだし、そもそも樹君が」

「……あの、ちょっといいですか？」

なんかまだまだ続きそうな蒼井さんの説教を遮つて、俺は疑問に思つた事をきく。

「えつと、……ヒムラって誰ですか？」

「ええ！？ 今更！？」

本当に驚いたように蒼井さんは声をあげる。だがしかし俺の頭

の中にヒミツなんて名前は

「……ほり、緋斑茜さん。樹君の言つてゐる……ノッポ、さん」

申し訳なれど、蒼井さんが言つた。「……ああ、思い出した。ノッポの苗字・緋斑。無駄にカッコよく難しいからとあだ名を考え、背が高いからとこうことで俺がノッポと勝手に呼んでるんだっけ。

「もう。武藤君ってたまに酷いよね。友達の名前ぐらいちゃんと覚えなきや」

「……まあ、頑張ります」

多分本名を呼ぶことなんて無いと思つが。

「それとさつきの事だけど、そもそも武藤君がちゃんとあの飴の事を確認しないのが悪いんだし、こうこうことを起こしたくなかったらもつとしつかりするべきだと思つた。大体

せつかくさつき遮った蒼井さんの説教はまだまだ続く。蒼井さんはたまのスイッチが入るとそうそう止まる」とはなく、あ、なんか朝礼の校長先生の話の時特有の耐え難い眠気が……。

「武藤君？　ちゃんと聞いてる？」

「は、はいっ。ちゃんと聞いてます。俺も悪いのは分かりました。だからもつその話は終わりといふことだ……」

「本当に分かつた？　もつ緋斑さんの事を田の敵にしない？」

「勿論です」

はつはつは。当たり前の事ですか。そんなまさか、この俺が蒼井さんのありがた〜いお説教を切り上げさせる為に話を合わせてるなんて、そんな、……まさか〜

反対側の蒼井さんは黙つたまま物音一つ立てない。だがしかし給水塔越しに感じる視線は、まるで俺を狩りつと言わんばかりの、その、言つなれば殺氣、のよくな……。

キーンローンカーンローン……

「あ、予鈴ですね。ほら蒼井さん、さつやと床りましょー」

俺は昼飯の後片付けを早々に済まし立ち上がる。

「何してるんですか蒼井さん！ 授業に間に合わないといと大変ですよ！」

「

「……へえ、珍しいね。武藤君が授業に間に合つたのに急ぐなんて」

俺はまだ座つたままの蒼井さんを横切りそのままの向こうのハシゴに手を掛けた。

降りるために不可抗力で振り向くと、

一瞬。一瞬だけ、蒼井さんの後ろに黒いオーラが見えた気がした。

……うん、氣のせい。あつと。……あつと。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8013c/>

媚薬のチカラ

2010年10月9日05時41分発行